

国家を超えられなかった教会
15年戦争下の日本プロテスタント教会
原 誠 著



日本キリスト教団出版局
6,720円(税込)

国家を超えられなかった教会 —15年戦争下の 日本プロテスタント教会—

原 誠 (天学神学部教授) 著

本書は、とても590字では紹介することのできない「大著」である。

「15年戦争下の日本プロテスタント教会」と副題にあるように、この時代は1872年のプロテスタント教会宣教開始以降、現在に至るまでの宣教の中間地点であり、著者は本書の意義を「中間総括」としている。教会は社会の中で存在する以上、その制約を受けることを避けられない。そのため、著者は広く文化的・社会思想的・法制的に時代状況を明らかにし、その上で当時のキリスト教を検証する。

また、戦時下、国家の危機的

状況の中で、また全てが天皇制に集中する中で、プロテスタント教会がどのように行動したのかを「多角的、実証的」に述べる。特徴的なのは、中央の動きを描く一方、その周縁にあった地方教会、海外との関わりに触れ、述べようとする点である。例えば、この時代に洗礼を受けてクリスチャンとなった人々の証言をまとめ、キリスト教に何を求めていたか分析がなされている点などである。

では、戦時下のキリスト教とはどのようなものであったのか。著者は、結論として「関係における『類比』の論理を見出すことが希薄であった」と述べた。教会は国家と対峙することができなかったのである。ここに当時の教会の姿が明らかにされた。続けて今後の日本のキリスト教の課題として「歴史の中でいかにして教会であるか」、「神ならぬものを神とすることの罪意識」を問うことであると述べる。濃密な一冊である。

矢吹大吾(天学神学部2003年度生)

ひとりは



思文閣出版
1,995円(税込)

ひとりは大切 —新島襄を語る(二)—

本井康博(天学神学部教授) 著

同志社の人間が新島襄を語ることは、実はそれほど簡単なことではない。誰もが新島の足跡や業績を知っているし、人それぞれに思い込みもあるからだ。あらためて、なにかを語るにしても、いたずらに屋上屋を架すことになるか、それともすれ違いに終わってしまうか。

本井康博さん(神学部教授)の本は、そんなためらいを軽々と乗り越えた良書である。本書を手にする、はじめは謎解きの面白さに誘われる。いわく、ラットランドの5000ドル伝説の真偽は? 「自責の杖」事件の真相は? など。しかし、各章を読みすすめ、著者とともにそ

の実体にせまるスリルに没頭するうちに、やがてピーンとはりつめた緊張の世界に入り込む。読了して目をつぶると、誰もが必ずやウーンと唸らされるのではない。

本井さんの放つメッセージは、恐らくはこうだ。新島は完璧な人間として立ちあらわれたわけではない。学生ストをうまく取捨できない自分を責め、退校処分にした学生を想い涙ぐむ。だが責任を回避しない。全力を尽くしてことにあたり、終生、自分も他者も生かそうと努めた。脱落する学生の手をしっかりと握り、ともに生きようとした。だから、のちに蘇峰が評して、「譬えてみれば、福沢(論吉)の事業はほとばしる『噴水』のごとし。しかるに新島のそれは木の葉を潜る『清泉』のごとし」といったところが、そのひたむきな生き方こそ、われわれの心を打つのだと。

最近、こんなに感動的な本に出会ったことはなかった。

梅津 實(天学法学部教授)



異文化・交流のはざまへ —内田淑子のルーツと生涯

竹中正夫（大学名誉教授）著
内田家のゲストブック（1922〜1969）には延1379の芳名が記され、その中には同志社の歴史で知る人びとから、著者を含む現存者たちに及ぶ多くの記名がある。特に戦後は日本再建のために人びとの往来が盛んで、彼らを送り迎える家になった。

本書は児童文学作家、日本の民話・民芸研究者・内田淑子の生涯が一つの主題であるが、同時に彼女のルーツ、つまり父・内田堯、母・榎垣郁が同志社で学び、アメリカで結ばれる背景から内田家の歴史がセツトになっている。

「異国での淋しく苦しい時代」



明石書店
2,625円(税込)

教育文化への挑戦

—多文化交流からみた 学校教育と生涯学習—

同志社大学教育文化学研究室編著

315ページにわたって11のバラエティに富む力作の論稿が所収されている。序章には全論文の紹介と、「教育文化学」の定義もみえる。沖田行司氏が語られるように「現実を生起する教育の諸問題に豊かな光を与えることが出来る教育文化学の構築」は、きわめて有意義で共感できる。文学部文化学科の教育学専攻は2005年4月に社会学部教育文化学科へ改編されたが、先立って機関誌も「バイディア」（1961年創刊）から1992年に「教育文化」へと学会誌に発展的改称を遂げている。そのような推移の中で、本

を生きた一世たちとともに、アメリカ人と自己認識して育ち市民権を持つ淑子たち二世も社会生活に入ってゆくにつれて統合には壁があり、現実には分離を強いられているのを思い知る極限が戦時下の強制収容であった。その体験も克明に描かれている。淑子はやがて「民俗の底辺にあるおもいを表現し、異文化交流を促進すると共に、一つの世界への共感を喚起」する多くの作品を通して各種の栄誉賞を受ける。

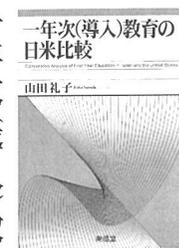
内田夫妻の生涯は「良心的に働き忍耐強く辛抱強く、子供たちには献身的であった」一世たちの典型であった。その性格の強靱さには尊敬と品位を備えていた。著者はそうした生きかたの「根底に同志社で培われた聖書によるキリスト教の信仰があった」と評している。内田父娘の同志社への物心両面の多くの支援があったことを改めて想い致す。

宮澤正典（女子大学名誉教授）

書は同志社「教育文化学」の真髄を世に問い、文化交流を通して世界へ発信する主張を盛り込んだものである。

第一部「文化交流と教育」には「文化交流と教育」・「日本の近代教育と西洋教育思想」・「日本人移民の文化変容と教育」の教育史3編がある上、「バイリンガルの言語習得と生活文化」、「シルクロードへのノスタルジア」と続く充実ぶりだ。「学への」挑戦」という書名にふさわしい。第二部「生涯学習の中の文化交流」には「学校教育における異文化理解教育」・「社会教育における文化交流」、さらに「大学における異文化間教育」と3ケースが紹介され、「図書館の国際文化交流」、「図書館における多文化サービス」、「スポーツのグローバル化」・「スポーツと共に、実に興味深いテーマ設定と言える。知育・徳育・体育をめぐる幅広い視野からの周到な目配りは魅力満載。どこからでも楽しく読み始められよう。

光川康雄（天学社会学部嘱託講師）



一年次(導入)教育 の日米比較

山田礼子（天学社会学部教授）著

東信堂
2,940円(税込)

大学1年次生を対象とする導入教育は高等教育の理念と教育実践との結節点にあたるという意味で、大学教育の転換期にふさわしい刊行といえる。

著者はまず、70年代から進められてきたアメリカの教育経験を詳細に吟味し、高等教育の内的な構造と機能を分析して、導入教育がアメリカにおいて有効に機能していることを実証する。ついで、同一の方法をわが国で厳正に適用した調査結果からわが国における導入教育の特性を分析し、専門教育への動機づけと勉学目標の確定にむけてプラス面を見るとともに、学生の能力・技能の多様化に対応す

る面での粗雑さもあわせ持つと指摘する。実践的に極めて的確かつ有意義な指摘である。

これらの研究成果は、著者がリーダーをつとめる同志社大学教育開発センターの企画にも熱く生かされている。筆者の所属する社会学部でも2005年新設を契機にして1年次導入教育を進めてきたが、筆者自身も本書から「伝統ある総合大学の実態水準に即することが決定的に重要である」という示唆を得て、具体的に進めるにあたっては（1）入学生の強い意欲を表現できるように、また（2）高水準のスキルを習得できるように、とイメージするようになった。

高等教育を中心に据えている同志社の教職員には是非とも精読してほしい好著である。

なお、同じ著者による「社会人大学院で何を学ぶか」（岩波アクティブ新書、2002年）の一読も薦めたい。

千田忠男（天学社会学部教授）



晃洋書房
9,500円(税込)

共生型まちづくりの 構想と現実

三沢謙一（天学名誉教授）編著

本書は関西文化学術研究都市（学研都市）を事例として「共生型まちづくり」の現状と課題を調査分析し、明確化しようとした労作である。編著者三沢謙一が学研都市を代表とする共同研究グループは、学研都市が産業立地とともに「共生型まちづくり」の開発構想を併せ持つことに注目し、1996年セカンド・ステージ開始以降と重なる10年間の共同研究を積み重ね、その成果を本書に集約した。本書は、第一部で研究の視点と枠組みを提示し、第二部〜第五部で、京都府域の精華町・木津町・京田辺市における日常生活圏での「地域共生」

の実態として「住民共生」、「現代共生」、「環境共生」、「都市建設事業」4側面の調査分析・考察を展開する。

「住民共生」として新旧住民の共生、主婦のソーシャルネットワーキング、子育てサークル、ボランティア活動など、「世代共生」として高齢者のパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポートなど、「環境共生」として事業系廃棄物処理等々、多面的に状況を浮き彫りした。「都市建設事業」として、「共生型まちづくり」の現状は構想当初のイメージから程遠い段階に留まると総括し、クラスター間交流、参加型まちづくりなどの課題を提起する。学研都市の「共生型まちづくり」構想と現実を社会学的アプローチにより、鮮やかに解明した開拓的業績として、その知見・卓見に学ぶところが大きい。

井岡 勉（天学社会学部教授）

日常の生活圏での「地域共生」

新刊紹介



アウシュヴィッツの回教徒
春秋社 3,675円(税込)

アウシュヴィッツの回教徒

柿本昭人(天学政策学部教授)著

この本を読んで、歴史は暴力だということを改めて考えさせられました。それは、過去の時代が暴力に満ち溢れているという意味ではありません。過去の歴史を解釈するわたしたちの知的な営み、それ自体が暴力だということなのです。

本書が取り上げているのは、二度と繰り返されてはならないと誰もが口にする、ナチズムとアウシュヴィッツ強制収容所の歴史です。しかしわたしたちが本書で遭遇するのは、通常の歴史書とは違い、「いつ・どこで・誰が・何を語ったか」の記録です。

その記録を整理する手がかり



文化情報学入門
勉誠出版 1,890円(税込)

文化情報学入門

村上征勝(天学文化情報学部教授)著

街を行き交う自動車をぼんやり眺めていると、一台一台が意志をもった生き物のようにみえてくる。それもそのはず、車はドライバーの意志で自在に動かされているのだ。

自動車には、時代の最新技術が結集している。そのハイテクの固まりを、ドライバーたちは何気なく操る。そのおかげで、わたしたちは行動や物流の能力を飛躍的に広げた。百年前の人間は、いまの「車社会」を想像もしなかつたろう。

考えてみればこれは凄いことだ。技術と人間とが一体になったとき、新しい世界が眼前に広がる。もしコンピュータという

とされているのが、タイトルにある「回教徒」という言葉です。この、ナチ強制収容所で「死にかけの抑留者」を指す「隠語」として用いられていた言葉が、へいかに語られてきたかを著者は執拗に収集し続けます。その収集の予先は、ナチズムの加担者にとどまらず、その犠牲者やナチズムを解釈する現代の歴史家たちにも向けられています。

著者が問題とするのは、「回教徒」という言葉が、ナチズムを語る人々によって自己の行為の正当化のために用いられ、ナチズムを「仕方がなかった」として肯定してしまうことになる構図そのものです。こうした言葉の暴力から自由になるには、この構図の「居心地の悪さ」を察知する知的な「皮膚感覚」と過去と現在を重ね合わせる「想像力」だというのが、歴史の暴力を批判する著者からのメッセージです。

川越 修(天学経済学部教授)

技術を自在に操ることができたならば、文化的な事物や現象はどう見えるのだろうか。あるいは、文化そのものもコンピュータを駆るひとびとによって、動かされていくのだろうか。車を駆ることで世界を広げたひとびとが、いまの社会を大きく動かしているように。

この本は、平成17年に開設された同志社大学文化情報学部の教員らによって書かれた。「データによって現象を理解する」という学部の教育・研究の方向性が、たいへんコンパクトにまとめられている。

ひとことといえば、この学部は情報ツールという車を自在に操りながら、文化の世界を走り抜けるドライバーを育てるところなのだろう。ここを巣立った学生たちは、きっと「車社会」に匹敵するような、何か新しい社会を作ってくれるだろう。

山田契治(国際日本文化研究センター助教)

政治心理学

オフェル・フェルドマン



人間は何を思い、いかに行動するか
ミネルヴァ書房 3,360円(税込)

政治心理学

オフェル・フェルドマン(天学政策学部教授)著

本書は、日本の政治学における未発達な分野を切り開く、好著である。戦後もなく「政治心理学」という著書が出版されたが、その後30年ほど、省みられることはなかった。

しかし、アメリカで『ハンドブック政治心理学』という本が編集されたのを契機に、日本でも再び「政治心理学」という本が編纂されて、政治心理学が復活したかにみえたが、投票行動の研究を除いて、再び20年近く、未発達のまままで今日まで推移してきた。

ところが、昨今、再びわが国で『ハンドブック政治心理学』として衣替えした著書が登場

出版

イノベーションの破壊と共鳴

山口栄一
NTT出版 2,730円(税込)

イノベーションの破壊と共鳴

山口栄一(天学ビジネス研究科教授)著

本書で一貫して描かれているのは、日本を、多様な人々が独創性を発揮できるチャンスに満ちた幸福な「共鳴場」にするためにはどうすればよいかという憂国の問いである。著者は、本書で日本のイノベーションシステムを独自の手法で観測し、仮説を立て、検証している。

本書において著者は第一線の研究者に対する膨大なインタビュー等から、大企業が失敗しベンチャー企業が成功する不可避的なメカニズムとして「パラダイム破壊型イノベーション」を提唱する。これは、科学者・技術者のもつ暗黙知を経営者に伝

し、公共選択論が主流となる中、世上の注目を集めた。本書も同様に、死語となっていた政治心理学というジャンルの復活を目ざしているという意味で、注目に値する著書である。

日本で政治心理学を駆使できる学者は数人程度であるかと思われるが、政治心理学をホームグラウンドにしているのは著者のみぐらいであることを考えると、貴重な研究である。

また、一読してみてもわかることであるが、難解になりがちな政治心理学の分野を、わかりやすく解きほぐし、誰もが興味をもって読めるように、文章表現も明快なタッチとなっている。

しかも、最近の動向も含め、その内容は多彩で、読み応えも十分にある。著者と海外の政治心理学者との豊富な交流や、政治心理学への造詣の深さがそれとなく伝わってくるものがある。

荒木義修(武蔵野大学現代社会学部教授)

達することが不可避的に困難だということに起因するもので、科学の本性に関わるものであるという。このことを描き出すために「パラダイム破壊型イノベーション」の例としてトランジスタと青色発光ダイオードに向け、その誕生の物語を生き生きとした筆致で描いている。これらの、なぜ大企業が失敗し、辺縁の地にあったベンチャー企業が成功したのかに関する研究から、著者は21世紀にあるべき企業経営の方法を論じ、新しい企業経営のあり方として「精神なき労働力の提供者」にすぎなかつた人間が、「実存的欲求」によって生きられることを可能にするような経営こそが、これからの産業社会のあり方にとつて重要であると主張している。これから起業を目指す方や企業の経営層、政策立案に携わる方々には是非一読をお勧めする。

玉田俊平太(四国学院大学経営戦略研究科助教)

新刊紹介



加地伸行 著
 加地伸行 著
 講談社
 1,680円(税込)

孔子が中国文明において不朽の地位を占めるのは、彼が天を法源として『道徳』の立場を確立したことによってである。

定言的(無前提に「汝くすべし」との命令形式)なる自律の規範としての道徳の立場は、絶対者の存在なしに定立し得ない。

「己欲せざる所、人に施す勿かれ」「人を愛す」との「仁」の規範は、「天、徳を予に生ず」との天を絶対者とする(「天己」という垂直原理の下に確立された「己一人」という水平原理の規範である。したがって、仁の愛は汎愛(博愛)を本質とする。この孔子によって開かれた道徳の立場を伝統的共同体の規

範・習俗たる(倫理)に拘束されることなく直截に追求する思想の運動は、墨家学派によって戦国期を通じて実践され、必然的にも全体主義の政教一体の統治システムの思想へと展開して行く。

しかし、『論語』に見える孔子の世界は、啓示的なる道徳の立場と歴史的なる倫理・学芸の立場との絶妙の均衡を追求せんとする思想の営為を示しており、その人物像は「君子」として示されている。仁の道徳は倫理の規範や学芸との均衡の上に追求され、同時に倫理の規範を再活性化せしめる契機として作用している。家共同体の孝や、国共同体の義や、宗教的精神としての敬などの規範と精神は、道徳の立場から再生せしめられた。

本書のキーワード「知徳兼備の教養人」とは、かような孔子における「君子」像を現代に蘇らせるものと言えよう。

吉永慎二郎 秋田大学教育文化学部教授



新古代学の視点
 小学館
 1,995円(税込)

考古学は「アルケオロジ」の異名を持つ、フィールドワークを基本とする学問である。まさに、著者ほど全国の遺跡をくまなく歩いている学者を私は知らない。しかし、当のご本人は自らの学問を考古学とは言わず、「古代学」の呼称を提唱する。なぜだろう。

その解答が、本書には端的に示されている。古墳とはいったい何なのか、なぜ出雲大社には異常に高い社殿が必要だったのか、豪族居館跡に出土する井泉は何のためか、装飾古墳の壁画に船のモチーフが多用されたの

はどうしてか。

豊富な発掘資料と文献とを積み上げ、精緻な分析が加えられているが、単なる謎解きではない。しかも、導き出される結論への過程は、推理小説よりも面白い。その理由は、遺跡、遺構、遺物に込められた当時の人々の心の有りようを懸命、真摯に探る著者の、心の姿勢にある。古代人の心の奥底への旅。それが「古代学」と解釈したい。

ここで思い出すのは、壁画の保存のためにはぎ取りを余儀なくされた奈良・明日香村のキトラ古墳のこと。「ハイテク考古学の一大成果」と、学界もマスコミも浮かきついていた発見当時、壁画自体の危機を強く主張していた学者は辰巳さんただ一人だった。あの時、文化庁や学界がその声に耳を傾けていれば、今日の惨状は回避出来たに違いない。

矢澤高太郎 読売新聞東京本社調査(研究本部主任研究員)



谷崎潤一郎の
 京都を歩く
 淡交社
 1,575円(税込)

先に『谷崎潤一郎―京都への愛着』(京都新聞社)を著し、谷崎と京都との関わりを詳らかにした著者が、文学散歩の友ともなるべく、よりやさしく書き下ろしたビジュアルな一冊である。明治四十五年、二十六歳で初めて京都を訪れた谷崎は、以後、京の四季・文化・芸能・料理等々を愛し、戦後は自ら潺湲亭と名づけた好みの邸に住まいして、東山山麓の法然院に墓所を定めるまで、五十数年間、歴史の都を「鼠耳」にした。『細雪』『月と狂言師』『潤一郎訳源氏物語』など、ゆかりの作品も

数多い。

本書は、谷崎が書き残した文章を基に、谷崎が歩き、眺め、賞味した、京都のあちこちを紹介する。嵯峨野の愛宕山鉄道、祇園末吉町のつばさかななど、今は廃業した電車やグリルを解説するのも、京都に詳しい著者ならではの美点であろう。また、「日頃城壁を高く設けて、あまり本心を打ち明けない」とする谷崎の一面的な京都人観に対し、「相手の心証を損ねずに己れの意思を表現する話術を生み出してきたまでで、本心を隠そうとしてきたわけではない」と、その誤解を解こうとするところは、京都生まれの私には深く共感できた。谷崎を愛し、京都を愛する著者の筆致は暖かい。

田中勲儀 大学文学部教授



白樺派の作家たち
 和泉書院
 3,780円(税込)

大正期の日本文学の中心的存在であった「白樺派」の影響は、文学界はもちろん、広く芸術活動にも及ぶものであり、新たな価値観を見出した。

本書は、その「白樺派」の中心的作家であった志賀直哉・有島武郎・武者小路実篤の3人について論じられている。

作品の成立過程、作者の個性や潜在的欲求における作品への影響、志賀直哉を中心とした3人の友好関係や相互比較など、を、詳細なデータと、作品の深

い読み込みにより、従来の評価にはない、それぞれの作家に対する新たな視点を明らかにしている。特に、第四章「志賀直哉とその周辺」は、3人の本質的な相違を見ることができ、3人の個性をより深く認識することができる。

「特権階級」「自我の肯定」といったイメージが先行する「白樺派」であるが、本書に見える作家の内面世界からは、これほどとは異なる「白樺派」が導きだされているように思う。

しかしながら、本書は文学研究者にのみアプローチされるのではなく、文学を愛読する多くの人々にも、関心と興味を抱かせ、かつ、今後の日本文学研究において重要な役割を担う1冊であろう。

小川裕香里 女子大学文学部博士後期課程